



公益社団法人 日本柔道整復師会（日整）の会員は全国に約 17,000 人。様々な場所で技能を生かして活躍しています。その名も「日整 Man/Woman」の活躍ぶりを、紙面およびホームページで報告いたします。



氏名 河村 亜希 (かわむら あき)

所属 茨城県柔道接骨師会

会員歴 平成 22 年 4 月入会

ひと言 父・祖父ともに日整会員で、実家の接骨院に就職と同時に入会しました。愛車の FIAT500 で通勤しています。好きなモデルは平子理沙さん。

将来は家庭を持ちながら、柔道整復師で頑張っていきたいです。

## 01. 国民、世界への貢献が出来る日整

### 憧れのモンゴル、初めての女性派遣者に

日整は、伝統ある大きな組織というイメージでした。各都道府県の社団法人が集まり、そして各都道府県社団法人はいくつかの支部から成っています。支部の先生は、日頃から、保険審査の際などに連絡を下さり、お力添えいただくことも多くあります。

学生の時から、恩師の方々によって日整の活動内容を知る機会があり、中でも、柔道整復師としての貢献、公益活動は、柔道整復師をより良くアピールできると感じていました。特に、モンゴル派遣には「臨床経験を積んで、私もいつかこんな事業に参加してみたい」と感じていました。

この日整の国際交流事業は、国際部が主幹で、JICA との共同事業です。モンゴルの地方の村に出向いて、2週間ほどの日程でバグ（村）医師を対象に骨折や脱臼等について講義をします。この

事業のきっかけは、モンゴル国立健康科学大学が柔道整復術をモンゴル国内でも活用したいと理解を示したことです。当大学はモンゴルの 8、9 割のバグ医師の出身校で、医科大学の中核です。バグ医師達の働く地方では医療施設が少なく、骨折後の変形治癒など後遺症が高頻度で発生しています。彼らはゲル（テント）で生活し、馬やバイクで患者のもとへ往診します。そのため、身近な物（針金、綿包帯など）を使った、徒手治療である柔道整復術を受け入れて下さったようです。

最初の派遣の時は、「女性が絶対に必要なの！お願いします。」と依頼がありました。派遣先の 1 つがイスラム圏である事と、国際交流に必要なジェンダーバランス（男女比）の必要性が理由で、偶然にも私は日整会員で初めての女性派遣者となりました。

派遣が決定し嬉しい気持ちでしたが、初めての海外、女性派遣者の必要性で私を選んで下さった

といっても、経験の浅い私に講師を務まるのだろうか…、と不安が募りましたが、自分なりに準備をしてモンゴルへ向かいました。

講義が始まると受講生達は、メモを取り、包帯等もすぐに習得し、とても熱心な様子に感激しました。受講生は、女性が多く、女性派遣者として、溶け込みやすい雰囲気を作るように頑張りました。

私も講義を行い、打ち合わせでは、派遣者にフォローを受け、今では自分で英語のスライドを作成し講義を実施しております。

またチームの中でも、特に健康科学大学の女性教授(バイガル教授)は体調に気遣って下さり、派遣者唯一の女性でしたが安心して過ごす事が出来ました。

大先輩の派遣者など、たくさんの方からのサポートを受けて自分の役割を果たすことが出来ました。



写真1. 整復実技指導

## 柔道整復師の明るい未来へと

同じ地方に再度訪れると、怪我の治療の成果を聴き、モンゴルでも怪我で苦しむ人達を救う事ができると、柔道整復術の素晴らしさを再認識します。

実は私が派遣の際に一番難しく感じるのは、家族の了解(私の場合は院長である父親)です。女性会員に必ずついてくる難関とは思いますが、女性派遣者はこれからも重要な役割を担います。

のでぜひ参加していただきたく思います。

柔道整復術を世界に広める活動で良い部分がアピールでき、これは柔道整復師の明るい未来につながると感じます。



写真2. 民族衣装(デール)を着てバイガル教授と

また、JICA とともにこの事業ができるのは、公益活動を大切にする日整であるからこそと思います。このような公益活動に期待し、その中でお仕事をいただく機会があれば、これからも前向きに取り組んでいきたいと思っています。



写真3. 祖父(右)、父(左)とモンゴル研修員(中右)